

友よ 第十一回

赤神 諒



第十一章 人を動かすものは

——天正十四年（一五八六年）十二月、豊後国・府内



国都南郊の丘に建つ上原館うえのはるやかたの庭から北を眺めると、夕照に染まる高崎山城たかさきやまじょうと府内の街をすっかり一望できた。少し歩けば大分川だが、その東にはさらに戸次川へつぎがわが流れている。大きな川が二つもあるとは、まったく面倒臭い国だ。

——こいつはいかん。関白殿下はずいぶんお怒りじゃわい。
仙石秀久は濡れて冷たくなった袖口で、額の汗をぬぐった。何度拭

友よ 第11回

いても、嫌な冷や汗が滲み出てくる。秀吉からの三通目の書状は、覚えるほど繰り返し読んだ。先月も二通届いたが、ほとんど同じ内容だった。刺々しい苛立ちが文面に溢れていた。

——やっぱり、出陣せんほうが得じゃろかな。

仙石は心が焼け爛れただそうなほどに焦っている。

秀吉に援軍を求めてきた大友家の当主、義統よしむねは三流の男で、仙石よりも頭が悪く、臆病者だった。九月に豊後ぶんごへ上陸して以来、その義統に請われるまま、豊前ぶんぜんと筑後ちくごで泡のように湧く小さな叛乱の火消しに汲々としているうち、島津の大軍が北上してきた。慌てて豊後まで戻ったものの、秀吉からは改めて、自分が大軍を率いて上陸するまで合戦は無用、あと四、五十日の間陣を固め、決して兵を動かすなどの厳命があった。もちろん戦をしないで済むなら、一番楽だ。

——じゃが、府内を落とされたら、誰のせいによればよいのじゃ？
一時は九州のうち六ヶ国を制し、九州探題きゅうしゅうたんたいにまで任ぜられていた大友家は、平安を貪ってきた大国ゆえに、本国豊後の国都まで敵に攻め込まれる事態を考えていなかったのか、府内は守るに難しい国都だった。

秀吉は仙石の無能を知っている。ゆえに何もするなど命じたわけだが、一番新しい秀吉の手紙の日付は十二月二日、もう八日も前だ。六日に敵の名将、島津家久しまづいえひさによる鶴賀城つるがじょうの総攻めが開始され、府内の南まで敵が迫り、豊後を奪われかねないという事情は、まだ大坂へ伝

友よ 第11回

わっていない。仙石は四国で一度、失敗していた。十河存保そごうながやすの救援に出向いたものの、尻尾を巻いて逃げ出し、結局、讃岐を長宗我部に奪われた。またもや豊後を失ったとして、赦されるのか。

——どうすれば、わしの損が一番少ない？

三年前の四国攻めを除き、これまで仙石は、ひたすら秀吉の指図に従ってきただけの男だ。それ以上でも、それ以下でもない。戦に勝った時も、なぜ勝ったのかさえ定かでなかった。自分ひとりでは、何をどうしてよいのか見当もつかぬ。

どんどん豊後が侵食されているのに、何もせずについて済まされるのか。本当に咎めを受けぬのか。勝ち負けなどいずれでも構わぬ。どのみち秀吉の大軍が来たら、勝つに決まっている。戦いの後、仙石が生き残ればいい。話はそれだけだ。

仙石は家中に相談できる相手が誰もいなかった。庄林一心しょうばやしかずただも去り、猛将の羽床資吉はゆかすけよしを含め、おしなべて仙石と同じくらいの脳味噌の持ち主ばかりだ。

「父上、かような所におわしましたか」

なんだ、秀範ひでのりか。ようやく父の偉大さに気付いたらしく、讃岐国十萬石の大名になってからというもの、生意気な態度がガラリと変わった。近ごろ仙石が三男と四男をことさら可愛がる様子を見せつけているせいもあるだろう。家督を望む秀範の魂胆は見え透いていて、卑屈な作り笑いが不快でならなかった。仙石自身も、信長や秀吉

友よ 第11回

には同じ顔をしていたに違いないが。仙石家御曹司の威光を笠に着て下には尊大に振る舞う秀範は、家中に無用の軋轢あつれきを引き起こしてばかりいた。

「はてさて、何としたものですかな」

秀範は自分の頭で考えず、まるで他人事のように言う。もしも豊後で失敗して没落したなら、再び掌を返して父を馬鹿にするに決まっていた。

仙石は元親が妬ましかった。子の信親は男振りも良い若き名将で、おまけに孝行者だ。明眸皓齒めいぼうこうしの羨ましいほどに美男の若者は、声まで爽やかだ。仙石のような見かけ倒しの「豪傑」などと違って、見た通りの偉丈夫いひょうじゆうだった。あんな息子を持つ元親が憎らしい。元親はもうすぐ隠居し、土佐で悠々自適の暮らしをするという。嫉妬で気が狂いそうだった。

「お前はどうか考えておるのだ？　いつまでもわしを頼ってはおれんのじゃぞ」

重々しく問い返すと、秀範が太めの鼻っ柱をツンと上げた。どうせ親父も途方に暮れているくせにと小馬鹿にしている。

「それがしなんぞより、味方には、戦上手の将たちがおるではござらんか。もっとも、足の引っ張り合いに精を出しておりますがな」

知った話か。因縁の四国勢をひとまとめにしたのは、仙石ではなく、秀吉の大失敗だ。まだしも知らぬ間柄のほうが、共通の敵に対して団

友よ 第11回

結もできようが、今回はどうてい不可能だ。

長宗我部と十河は、上から下まで将兵がいみ合っていた。無理もない。十年も戦をして、互いに殺された一族郎党が山ほどいる。とりわけ一旦は滅ぼされた十河の長宗我部に対する屈辱と怨恨は根深い。元親と存保は互いに目を合わせようともせず、同席もできる限り避けた。だが仙石にとっては、両者が手を結んで齒向かって来るより、対立してくれるほうがよかった。それぞれが仙石を介してしか物事を進められない状況はむしろ好都合で、仙石が失敗した場合の言い訳にも使えそうだと考えて、ほったらかしていた。ただひとり、若い信親だけは、両家の間を取り持とうとしきりに動いている様子だが、両家に和合の兆しは全くない。

「こたびは皆、呉越同舟^{こえつどうしゆう}じゃ。一方が他方を陥れようと下心で献じてきた策など、危のうて採れるはずもなかる。長宗我部も十河も、仙石が大手柄を立てるのは癪^{しゃく}じゃ。隙あらばわしの足を引っ張ろうと考えておるわ。ゆえに、出陣に反対しておるのよ。その手には乗らぬ」

「なるほど。さすがは父上にございまする」

仙石は得意になった。乱世で見事に身を保ってきたのだ。人の心くらい読めずにどうする。

「奴らは将兵の命を惜しんでろくろく戦もせず、わしのせいで府内を失ったと言ひ立てる肚^{はら}じゃ」

このまま島津を捨ておけば、至近の要衝、鶴賀城が落ちて、国都へ

友よ 第11回

の侵攻を許してしまう。

仙石も、戦で勝てるなどと思ってはいない。引き分けが望ましいが、とにかく何もしないで負けて逃げるといふ事態を避けたいだけだ。

戦って府内を失ったのなら、四国攻めの失敗と同様、秀吉から赦しを得られるはずだ。兵も敵より少なく、援軍も来ない。あの時と全く同じ状況ではないか。官兵衛でも勝てまい。

だから、出陣するほうが得だと、仙石の保身の本能が訴え続けてやまぬのだ。

しかるに元親は反対した。秀吉の指図に従い、高崎山城で守りを固めるべしと意見してきた。元親は端から仙石を馬鹿にし、蔑さげすんでいゝる。それは仕方ないが、本心は軍監、すなわち総大将たる仙石に意趣返しをしたいのだ。仙石が元親の立場なら、必ずそうする。

念のため信親にも尋ねてみると、やはり父親と同じ答えが返ってきた。だが信親は、元親とは違う。

軍議でも仙石をちゃんと総大将らしく扱ってくれた。秀吉について色々尋ねてきて、仙石が答えてやると、なるほどという顔で頷く。媚びもせず、馬鹿にもしない。商人から献上された仙石お気に入りの南蛮菓子を少しだけくれてやった時も、素直に喜んでいた。

秀吉も信親をいたく気に入っていた。味方に付けたほうが今後何かと得だから、仙石も信親とだけは仲良くしよう決めていた。元親がいなければいいのだが、信親も孝行者だから結局は親の言いなり

友よ 第11回

だろう。父を差し置いて、仙石のためを思うはずがない。そうすると、信親があえて寡兵での出陣を秀吉に願ったのも、仙石の手柄を邪魔するためだったと見ていい。要するに、あの父子の進言は無視をするか、逆を行ったほうが正解だ。

もう一人の十河存保にも別に尋ねたが、答えは同じく「守りに徹すべし」だった。

存保が仙石を心底軽蔑し、毛嫌いしていることは、その慇懃無礼な態度で手に取るようにわかった。

讃岐へ救援に向かいながら、存保の籠城する虎丸城とらまるじょうに辿り着けもせず逃げ帰ったのだから、仕方ない。結果、元親に滅ぼされた挙句、讃岐と阿波の覇者であった三好家の所領へ、成り上がり者の馬の骨がやって来て、上に立ったのだ。仙石に対し、およそ好意を持てるはずがない。存保は人間の出来としても、仙石より上だ。敵に回したくはないが、仙石を陥れて讃岐の回復を考えている節があった。注意せねば、引きずり降ろされかねない。

しょせん長宗我部と十河にとって、九州のこの戦は他人事なのだ。保身さえ図ればよく、あわよくば仙石の没落に結び付けたがっている。成功すれば大きな顔をし、失敗しても仙石の指図だったと逃げを打てばいい。

大友義統は論外だ。己れ一人の保身さえ覚束おぼつかない愚か者だった。念のために訊ねると、「よしなに」とだけ答えた。

友よ 第11回

今回は畢竟、さしつか仙石がただ独りで決めねばならぬわけだ。

だが、望みはある。仙石の強運だ。何事も最後にはうまく行くと決まっていた。あわよくばさらに出世して、仙石を見放した庄林を見返してやりたい。

庭へ出てくる飯炊きの下女の顔が気になって、ぼーっと見とれてみると、背後で騒々しい音がし、転がるように巨体が現れた。間の悪い羽床資吉だ。

「長宗我部の陣より、信親公がお越しにござる。内々で総大将のお耳に入れたき儀があると」

信親は元家臣の資吉を通して、仙石に面会を求めてくる。父の元親と違い、対等ではなく、年若のせいもあって遜へりくだっているわけだ。

「この何かと忙しい折りに、いったい何用じゃらな」

少し勿体ぶったが、礼儀正しい信親なら、会ってやってもいい。総大将の気分も味わえる。

仙石は庭から座敷へ上がり、上座に腰を下ろした。秀範と資吉は少し離れて座る。

やがて現れた長身の若者は、仙石に向かって平伏し、丁重に挨拶してきた。見惚れるほどに優雅な仕草だ。足の運びに合わせて動く体の重心は、常にぶれずに中央にあり、手の軽い振り出しまでが美しくかった。これほど見事な立ち居振る舞いをする将が、はたして羽柴家中に何人いるか。

友よ 第11回

「本日、鶴賀城主の利光宗魚としみつ そうぎよが流れ弾に当たって、戦死した由」
仙石はあっと叫んで、たじろいだ。のけぞって、後ろ手に両手を突いてしまった。

宗魚は戦上手のキリシタン武将だと聞いていたが、鶴賀城が落城すれば、すぐにもこの府内へ敵の大軍がやってくる。同じ総大将でも、相手は戦上手として武名轟とんがく島津家久だ。仙石ごときが挑んだところで、まず勝ち目はなかった。

「な、何かの間違いではないのか」

まだ攻め始めて五日目ではないか。ひと月くらいは頑張っただけで籠城してくれていると思ひ込んでいた。仙石は手にびっしりと掻いた冷や汗を、袴の膝小僧で拭ぬぐう。

「城に忍ばせていたわが手の者が戻りました。間違いまごちがひごさいませぬ」
鶴賀城は島津軍に十重とえ二十重はたえに包囲されているはずだ。長宗我部にはそんな城へ出入りできる忍びがいるのか。

「はてさて、何としたものか……」

考えるふりをしてみたものの、もうどうしていいか、わからなくなった。元親と存保が仙石を止めるから何もなかったと言ひ訳すれば、二人に責任を押し付けられぬものか。

「されば、今こそ攻める好機にごさいます。夜襲を仕掛けられませ。直ちに、出陣のご下知を」

「な、何じゃと？」

友よ 第11回

仙石は内心ひどく狼狽しながら、信親の整った顔を見つめた。

「忍びによれば、宗魚は人徳厚き仁将にて、城内の者たちにいたく慕われておりました。将を失ったキリシタンたちは今、復仇の念に燃えておりまする」

「じゃが、あの島津軍が一万八千もの兵で城を包囲しておるのじゃぞ。城将が死んでしもうたに、勝てるはずがあるまい」

仙石は出陣を主張してきた身であり、われながら妙な言い草だとは思った。

「今なら、敵に油断がござる。わが軍は八千余。城内のキリシタンたちは三千六百とか。戦のやり方次第では、勝機がございます。今宵、夜陰に紛れて戸次川へつぎがわを遡り、城を包囲する島津軍の背後を、全軍一丸となって奇襲。城内の兵と挟撃すれば、必ずや勝利できましよう」

この若者は、もしや本気で島津家久に勝つつもりなのか。

「いや、こいつは新たな動きじゃ。しばし様子を見たほうが良からうて。軽々しく動いてはならん」

「恐れながら、すでに城内の兵糧は尽きており、少しでも日が経てば、キリシタンたちは飢えて戦えぬようになります。この策は、今この時しか奏功いたしませぬ」

若者が目をキラキラ輝かせている。仙石を騙しているようには見えなかった。

この機を逃せば鶴賀城は落ち、敵が府内に侵攻してくる。

友よ 第11回

実は讃岐勢の兵糧が足りなくなっていた。今のままでは籠城もままならぬ。

秀吉お気に入りからの献策だ。失敗しても、仙石一人が責めを負わされはすまい。他方、このまま無為無策で敗れ、府内を失うほうが怖い。ならばやはり、出陣か……。

仙石は心の中で百数えることにした。よくよく考えていると見せかけるために、時々使っている技だ。信親、秀範、資吉、若い三人の目に、眉をひそ顰めて思案する仙石の姿を焼き付けておくのだ。

念を入れて百八まで数え上げると、仙石はおもむろにまがた瞼を開き、重々しく言った。

「信親、よう言うた！ 出陣じゃ、全軍で出る！」

「はっ。お許しあらば、長宗我部が先鋒を承りまする」

「任せる！ 島津家久が首級しるしを挙げい！」

若者が顔を下げ、きびきびとした動作で去ってゆく。実に気持ちがいい。仙石は自分が秀吉になり代わったような心地がした。

「秀範に資吉！ 聞いた通りじゃ。仙石秀久一世代の勝負、勝ちに行くぞ！」

興奮する仙石に合わせて雄叫びを上げたのは、資吉だけだった。



二

街道に馬を駆るうち、戸次川の雄渾ゆうこんな流れが見えてきた。龍でも棲

友よ 第11回

「んでいそような大河だった。」

昼下がりの柔らかな冬の日差しを浴びて、川面が煌めいている。

信親は手綱を軽く引いて馬の歩みを遅らせると、すぐ後ろに乗る、いに話しかけた。

「そなたが命懸けで知らせてくれたものを、すまなんだな」

鶴賀城へ潜入し、的確に戦況を掴んで注進してきたのは、るいだった。もう入江左門でなく、正式にるいとして、信親隊に加えられている。今日も鶴賀城が総攻めに遭っていると知らせてくれた。

結局、仙石は「出陣を取りやめる」と各隊に通達してきた。深更、上原館で面会を求めた信親には会ってくれなかった。資吉によると、考え抜いた末にやはり気が変わったのだという。

「移り気な総大将で、この先が心配でございます。ご子息とも喧嘩ばかりなさっているとか」

「澄んだ川も、日によって濁りもする。誰でも時には不機嫌になるものだ」

だがこれで、四国勢は勝機を逸した。府内も守れまい。

「高崎山城でしかと守りを固めておる限り、負けはせぬ。秀吉公の大軍が上陸すれば、四国の時と変わりない。戦は避けられまいが、長宗我部が島津への使者を願い出るつもりだ」

「信親さまはご立派です」

るいは後ろから馬上の信親にしっかりとしがみついている。元親

友よ 第11回

が秀吉から賜った〈内記黒〉を借りた。名馬の噂に違わず、葦毛の駿馬は乗り心地がいい。

川べりまで来ると、信親はひらりと降りて猫柳の幹に手綱を括りつけた。

るいは馬の背に乗ったままだ。信親が手を差し伸べると、笑顔で抱きついてきた。甘えたかったのか、今でも少女のように感じる時があった。無粋な濃鼠の入江左門の恰好だが、小柄なるいは鳥の羽のように軽い。抱き上げる時、白い首筋に瑠璃の首飾りがちらりと見えた。

ふたり並んで川辺に腰を下ろす。

「大きな川が二つもあるとは、贅沢な街だな」

府内には、大分川と戸次川が南から北へ並んで流れてくる。

「戸次川をずっと遡れば、見事な大滝が幾つもあるそうだ。かの雪舟も訪れて、鎮田瀑図を描いたという。やはり豊後にも猿猴の言い伝えがあるらしいが、実は秘密の話聞いた」

周りに人もいないのに声を潜めると、るいが耳を寄せてきた。

「龍が棲むという大きな滝壺があるのだ。戦が終わったら、一緒に訪ねてみぬか」

傍らのるいが、肩を小刻みに震わせている。また川の話を始めたらだららう。

「どなたから聞かれたのですか」

「戸次統常殿だ。その眼で、霧の中にいる龍の大きな影を見たそうだ」

友よ 第11回

「影、を？」

るいが口に手を当てながら、声を出して笑った。近ごろはよく笑う。時代が運命を狂わせただけで、もともとは笑い上戸だったのかも知れない。これからは、今までのぶんも含めて、思う存分笑えばいい。

「信じておらぬな、るい」

「いえ、若さまとご一緒に大きな影の主をきつと見つけましょう」

「統常殿とは、いずれ豊後の川と温泉を案内してもらおう約束もした。新しき友だ」

昨年陣没した大友家最高の将、たちばなどうせつ立花道雪の実家を継いだ若き当主で、たまたま信親と同齡だったせいもあって、たちまち意気投合した。かつては敵対したものの、大友家の援軍として四国から遠征してきた長宗我部に対し、大友諸将は感謝の念を抱いていた。

「若さまは、誰とでもすぐに仲良くなられますね」

「四国勢はすこぶる仲が悪いゆえ、大友家に間に入ってもらえぬかと思っただけ。これから皆で力を合わせて戦うのだ。皆が友となれば、さらに大きな力を出せる」

「でも、大友家のご当主はどうも評判の良くないお人のようでございますね」

「乱世は苦しいものだ。戦が苦手でも、これからは皆で力を合わせて、まつしごとよき政をなさればよい」

川べりで魚獲りに興じる童たちの歓声が聞こえてきた。ふと弥次

友よ 第11回

郎を思い出した。

「楽しそうだな。あの子たちを守ってやらねば」

すぐ近くの鶴崎城では、吉岡妙林尼よしおかみまうりんなる女武将が籠城の支度を進め、戸次川を五里ほど遡った鶴賀城では、キリシタンたちが立て籠もり、島津の大軍と絶望的な籠城戦を演じている。

「若さまは誰かを守ってばかりですね」

「守るのが、俺の仕事だからな」

信親は懐から出した小包こづつみを開いた。

「食べるか、るい？ 金平糖こんぺいとうという南蛮の変わった菓子だ」

「まあ、ごつごつ尖った水晶のよう」

るいは、差し出した掌上から一粒つまんで口に入れた。

コリコリ音を立てて噛んでいる。

「かように珍しい物を、どちらで？」

「仙石殿がくださった。資吉によると、俺は少し気に入られているらしい」

「わかる気がいたします。皆、陰口ばかり叩いています、信親さまは決して仰いませんもの」

「人の悪口を言うと、母上に叱られるからな」

仙石も好きで戦争などやっついてまい。乱世でさえなければ、誰ともいがみ合わず、のんびり美濃で野良仕事でもしながら暮らしていたのではないか。あと少して、そんな時代が来る。

友よ 第11回

信親も金平糖をつまんで口の中に入れた。甘い。

「このまま四国勢がいがみ合っておっては、勝てる戦にも勝てぬ。十河殿にも事あるごとに話しかけているが、全然相手にしてもらえぬのだ」

十河存保にしてみれば当然だろう。十年にわたり長宗我部に攻められ続け、一族や家臣を討たれ、阿波を奪われ、ついには讃岐を逐われた。返り咲いたとはいえ、かつての名門が十河三万石の小領に押し込められたのだ。攻める側と攻められる側で抱く憎しみは、似てはいても、質が違う。存保が長宗我部に対して強い怨恨を抱くのも、無理はなかった。

「喉が渴いたな」

信親は水際まで寄るとしゃがみ込み、両手で水をすくった。口に含んでみる。

「土佐とは違う。これが豊後の味か。かすかに龍の匂いがする」

「本当ですか？ わたしにも下さいまし」

すぐそばまで来たるいに、すくい直した水を差し出す。るいは信親の大きな手を白い両手で包み、唇を付けて飲み始めた。くすぐったい。

「いかがであった？」

顔を上げたるいに尋ねると、小首を傾げている。

「若さまの味がいたしました」

ふたりに笑った。るいとは、昔から恋仲だったような気がする。

友よ 第11回

近くでニャアと野良猫が鳴き、るいのそばに寄ってきた。

「猫たちはるいが好きなのだな」

「……今、わたしが人でいられるのは、信親さまと猫たちのおかげだ
と思います」

るいが猫を抱き上げる。はっきりと言葉の意味は掴めぬが、るいの過去に関わりがあるのだろう。またいつか、ゆっくりと話を聞いて、痛みを分かち合えばいい。

異国の冬日が早くも傾き始めると、川風が急に冷たくなった。

川を行き交う船も、街道を駆ける馬も、にわかには急ぎ始めたような気がした。

「戻るか。皆が心配しておるやも知れぬ」

「お待ちくださりませ」

るいが信親にしがみついていた。温かい。座ったまま、柔らかい体を猫ごと抱き締める。

「あと、少しだけ……」

信親がるいに声を掛けると、彦十郎たちは気を利かせて場からいなくなる。戦の迫る異郷とはいえ、武芸百般に通じる信親をるいが警戒しているのだから心配はないはずだが、二蔵あたりがこっそり後を付けて、見張ってくれているのかも知れない。

構うものか。皆、友だ。信親は腕の中のもるいの髪に頬ずりした。

友よ 第11回



仙石はハッと目を覚ました。

ここは……上原館の寝所か。

辺りはすでに薄暗かった。実によく寝た。口元に垂れていたよだれを拭く。もう夕方だ。

決して誰も入るなど言い付けておいたせいで、明かりも灯っていなかった。胸をさする。出陣するつもりで夜中に食べ過ぎたせいか、胸焼けがした。

悩んだ末、昨夜は結局、兵を動かさなかった。

もしも信親の策を実行していたら、勝つたろうか。いや、敵は名将の率いる大軍だ。負ける恐れも多分にあった。信親は才気溢れる若者だが、しよせんは二十二歳だ。戦を始めて、まだ十年にもならぬではないか。

まだ誰にも明かしていない秘密だが、あの引田ひけたでの敗戦以来、「命あつての物種」が仙石の座右の銘となった。幸い仙石はあの時まで、生死の境をさまよう危地に陥った戦は経験しなかったから、この秘密に気付いているのは、つまらぬところで目端が利く秀範くらいだろう。

仙石が今回出陣を取りやめたのには、ちゃんとした理由があった。落ち着いて考えてみれば、信親の裏で元親が一枚噛んでいないはずがないのだ。かねて長宗我部は島津と誼よしみがあった。島津と密約を

友よ 第11回

結んで仙石を討つくらい、主筋の一条家まで減ぼした元親なら、やりかねぬ。危うく信親の笑顔に騙されかけたが、仙石を陥れる元親の姦計けいだったと見ていい。夜半に悩み抜いて外へ出ると、冷たい冬の雨が降り始めていた。寒い日に戦をやるのは嫌だ。掌で細かい雨粒を受け止めた時、出陣はしないと決め、資吉に命じて長宗我部と十河に伝えさせ、寢床へもぐり込んだのだった――。

仙石が寢床の中で大きな音で放屁した時、襖ふすまごしに声が出た。

「殿、お目覚めでございまするか」

始終そばにいられると鬱陶うっとうしいから、近ごろは用事が済んだら目の前から消えるよう、皆に命じてあった。資吉は昨夜、熟睡中の仙石を起こし、信親と会うようしつこく説得しにきた。仙石に嫌々ながら仕えている若者だ。もう長宗我部方に寝返っているやも知れぬ。用心が必要だった。

「お命じあった米の件ですが――」

襖が開くと、大柄な若者が狐につままれたような顔つきで首を捻っていた。

「何じゃ、早う申せ」

自分はこっそり満腹になるまで食べているが、兵糧が足りないのが心配だった。もともと戦乱に明け暮れていた四国、とりわけ戦地となった讃岐では国力が低下し、九州の役に際しても十分な兵糧を集められなかった。上陸から二ヶ月余り、ほとんど兵糧も尽きた。悔し

友よ 第11回

いことに長宗我部は十分な兵糧を用意していたが、無心などとしては総大将の沽券こけんに関わる。大友義統に調達を命じたが、大友家は十年近い戦乱で国力を落としており、自軍の分の手配さえままならなかった。仙石はやむなく豊後商人たちに供出を命じていたのだが、難航していた。

「ひとまず、ふた月分ほど調達できたとの由」

「やればできるではないか。いかほど払えと言うてきた？」

商人たちには、秀吉が来てから大盤振る舞いすると言っているが、「ないものはない」とすげなかった。割高なものを掴まされるより、安めに上げておいたほうが、秀吉は喜ぶ。

「それが、献上する、と……」

資吉は首を傾げているが、仙石にはわかった。見よ、これこそは関白殿下の威光だ。これから天下人となる秀吉を、商人たちが無理をしてまで買っているわけだ。

「ご命令に従い、大友家の者たちが矢弾を高崎山城へ運び込み始めたそうにございまする」

かねてしつこく命じていたが、ようやく動き出したか。やはり下手したてに出なくてよかった。

仙石が下の者に対し尊大に振る舞うのには、ちゃんとした理由があった。仙石は天下人秀吉に認められて大抜擢された寵臣ちやうしんであり、秀吉の代人なのだ。下手へたに謙虚であれば、主の秀吉が見くびられる。

友よ 第11回

よし。すべてが仙石の思い通りに動き始めていた。

夜半の出陣命令も、夜明け前の出撃中止も、仙石が決めたのだ。

自分の言った通りに、人が従う。何と言う快感か。

——これが、本当の力、だ。

力とは、思いのままに人を動かせることだ。力の快感を最も心地よく味わえるのは、本来なら自分より強く、優れた相手が異を唱えているのに、それでも自分に従わせる時だ。

長宗我部元親は一土豪から土佐一國を平定し、さらには四國統一まで成し遂げた英雄だ。その嫡男信親は武芸百般に通じた土佐の麒麟児だ。十河存保は三好家の血を引く名門で、長宗我部と四國で覇を競った名将だ。まさしく錚々たる武將が今、仙石秀久の意のままに動く。

これこそが、かなのだ。ああ、心地よい。

さらに大きな快感を、秀吉は手にしているわけか……。

秀吉の気持ちがよくわかった。天下を目指すのは、日ノ本のあらゆる人間を従わせる快感を味わいたいからだ。なるほど、周りの二流の人間たちが立身出世にあくせくしていたのも、この心地よい力に憧れていたせいだ。これまで仙石は謙虚でありすぎた。だが、仙石は秀吉ほどの男に認められ、大抜擢されたのだ。自分をもっと誇りに思っている。

おろん仙石は、虎の威を借る狐だ。だが、虎の威を借りられるのは、

友よ 第11回

狐に借りる力があるからだ。借り物でも、皆がそれに従わねばならぬのなら、仙石が威を持っていくのとさして変わらぬ。狼どもは狐より強かろう。だがそれでも、虎の威を借りられる狐には勝てぬのだ。

——わしは、もそつと力が欲しい。

もし九州の役で手柄を立てれば、力が得られる。より大きな快感を味わえる。

立身出世において、仙石には一度の失敗もなかった。負けて逃げた四国攻めだってそうだ。これはもう、一流の証と言っているのではないのか。そうだ、ずっと勘違いしてきたが、仙石はもう、二流ではない。保身のために、仙石はどれだけ涙ぐましい努力を重ねてきたろうか。乱世では、保身さえ万全なら、他が減んでしまい、自分が浮かび上がるのだ。

この世に仙石ほど運のいい男は稀だ。これは生まれつきの才能だ。官兵衛が急に馬鹿になったり、清正が突然弱くなりはいしないのと同じように、今回も運がある。

仙石は運だけでのし上がってきた男よと馬鹿にする連中を、見返してやりたい。運も力だ。仙石の快感にどこか後ろめたさがあるのは、威が完全な借り物だからだ。だが、仮にたとえば小早川隆景のごとくこばやかわたかかげ実力をも認められたなら、もっと気持ちいいに決まっている。

仙石に足りぬのは、自分の力で勝利したという本物の実績だ。

もしもあの島津家久に勝てば、仙石は運だけでなく、実力でここま

友よ 第11回

で出世した男だと、天下が認めるだろう。実力が伴えば、真の快感を味わえるはずだ。

数で圧倒する秀吉軍が上陸すれば、勝つのは当たり前だ。今、九州へ戦上手たちが向かっている。小早川や黒田に合流させられれば、仙石はその下に服従せねばならぬ。その者たちが到着したとき、この戦は仙石の戦ではなくなるのだ。うかうかしていれば、綺羅星のごとく輝く名将たちが次々と九州へ上陸してくる。大勝利の中で、仙石など一顧だにされまい。

もしも仙石の人生で、最も華々しく活躍できる機会があるとすれば、まさしく今ではないのか。仙石が最前線にあってなぜか総大将でいられる今なら、〈カ〉を使い、諸将に指図できる。

九州の役が終われば、戦はもう数えるほどしかあるまい。ものものはずみで仙石の配下となりはしたが、次の戦では、仙石よりはるかに戦上手な長宗我部が四国勢の総大将となるやも知れぬ。いずれ降伏するであろう島津も、大活躍するに違いない。とすればやはり、これが最後の機会だろう。

仙石は戦上手ではないが、政のほうがもっと苦手だ。

——やるなら、今しかない。やっぱり、戦じゃ。

ひたすら無難に歩んできた人生で、一度くらいは冒険をしてみてもいい。

二年前、仙石は長宗我部父子に、全く齒が立たなかった。あれほど

友よ 第11回

強い連中なら、島津なんぞという田舎侍をやっつけてくれるはずだ。元親が従うかは不安もあるが、自慢の嫡男が出陣を献策してきたのだ。戦ってくれるだろう。

人間には、生まれつき運のいい人間と悪い人間がいる。背の高低と同じで、これは後から変えられない。仙石は万人が認める強運の男なのだ。失敗するはずが、なかった。

「今宵は皆にたっぷり飯を食わせい！ 明日は戦じゃ！」

仙石は重々しく雄叫びを上げた。が、返事はない。

振り返ると、すでに資吉の姿はなく、仙石が平らげた飯の器が、下げられぬまま部屋の隅に置かれているだけだった。



四

府内の中心にある萬壽寺まんじゆじは、三百年近い歴史を持つ大友家の菩提寺だという。

異郷の広大な寺の境内の一角で、十河存保は焚き火で暖をとりながら、真冬の縁側に独りぽつねんと座り、炎を見つめている。昨日と違い、冬にしては暖かい夜だった。

——この戦は負ける。十河はいかに生き延びるか。

仙石の本陣から羽床資吉が来て、夜明け前に全軍で出陣するとの命を伝えてきた。

常在戦場の十河勢は、いつでも出陣の支度が整っている。皆に覚悟

友よ 第11回

と刻限を短く伝えた後は、取り立ててすべき事もなかった。

島津軍は二万近いと伝わっていた。対する羽柴軍は八千だが、実際に戦力となりうるのは長宗我部勢三千と十河勢一千に、戸次統常の大友勢数百のみだろう。

秀吉には、何と敗戦の申し開きをするか。

存保は一貫して反対してきたが、秀吉に背いてまで出陣するよう総大将が命じたため、不本意ながらこれに従い、敗れた。おろん仙石は没落するだろう。この負け戦を生き延びて、援軍到着後の勝ち戦で手柄を立てれば、仙石から讃岐を奪い返し、三好家を再興できぬものか。

赤沢宗伝あかさわそうでんが生きていたら、いかに献策してくれたろうか。七条兼仲かねなかつの巨体がそばにあれば、どれほど心強かったろう。あの中富川なかとみがわだけではない。存保は大切な家臣や一族を、長宗我部によってことごとく奪われてきた。四国の役後は三好宗家の継承も認められなかった。名門三好は滅んだのだ。

長宗我部勢はすぐ隣の太友館やかたで寝泊りしている。

府内に在陣中、十河兵は酒が入るとへ鳥刺し舞をこれ見よがしにやるようになった。中富川の洪水で行き場がなくなり、三好方により射殺された土佐の者たちを真似て嗤う踊りである。存保は快く思わなかったが、長宗我部を憎む気持ちは痛いほどわかるから、見て見ぬふりをしていた。すると、これに気付いた長宗我部兵も、三好方の卑

友よ 第11回

怯な振る舞いを嘲るためだと、そっくりの舞を始めたらしい。

「十河様、折り入ってお願いがございまする」

現れたのは、先刻も来た資吉だった。中讃の羽床家は、本来なら存保の陪臣の身だが、長宗我部に降くだった後、今では仙石に仕えている。

三好家を見限ったのは、資吉の父が当主の頃だ。

「何じゃ、まさかまた出陣を取りやめるのか？ 籠城するなら、早いほうがよいぞ」

資吉はさっき出陣の命令を伝えに来たばかりである。

「いえ、総大将は島津を討つと、息巻いておられまする」

いざ戦となれば、存保の十河勢一千が讃岐勢の主力とならざるを得まい。仙石率いる讃岐勢二千は頼りない連中ばかりだが、唯一、資吉の羽床勢のみが少数ながら頼りになると、転戦を重ねるうちにわかった。かつての敵だが、存保から資吉に声を掛け、時おり親しく話をしてきた。不器用ながら信じていい若者だと、存保は見ていた。

「あの臆病な御仁のことじゃ。今朝のように、また朝令暮改やも知れんがな」

仙石秀久は軽蔑すべき三流の将だった。

秀吉がああ男を四国勢の総大将に据えたのは、明らかかな失態だ。若くとも藤堂高虎とうどうたかとらか、小西行長こにしゆきなあたりなら不安は少ないが、あえて仙石を選んだのは、仇敵長宗我部の下に十河を置かぬ心配りではあったろう。

友よ 第11回

「十河様。長宗我部の御曹司にお会いくださいませぬか」

資吉ののっぺりした顔を見返した。裏表はなさそうだ。

信親とは同陣してから、何度も顔を合わせている。白い歯を見せ、微笑みながら話しかけてくるが、存保はすげなくあしらってきた。大三好家は長宗我部によって息の根を止められたのだ。宗伝、兼仲を始め、多くの大切な者たちが命を奪われた。同じ場にいるだけで耐え難い。まして談笑するなど、ありえなかった。

「なぜ、会わねばならぬ？」

何より信親を赦せぬのは、兼仲自慢の赤柄の大薙刀を使っていることだ。兼仲の魂を辱め^{はずかし}る所業ではないか。あれを見るたび、存保の腹は無念と屈辱で煮えくり返るのだ。

「今は、お味方にございまする」

十河と長宗我部の間に横たわる怨恨の溝は深く、暗い。秀吉の大援軍が来るまでのあとふた月ほどを耐えればいいだけだと、存保は自分に言い聞かせてきた。

「ほう。味方とは知らなんだな。たまたま今は同じ陣におるが、もしも長宗我部を陥れる機会があれば、わしは逃さぬぞ」

両家の間に立つ資吉も、大きな体を縮こまらせている。気付かぬうちに、存保は資吉を睨みつけていたらしい。

「会ってお話しいただければ、必ずや得をしたお気持ちになれまする」

友よ 第11回

意外な物の言い方に、存保はわずかに心を緩めた。何事も損得勘定で考えるとは、資吉もさもない主に似てきたのか。

「なぜさように言い切れる？ お前の旧主だからか？」

「いえ、わが友にございますれば」

胸を張って答える資吉の笑顔と「友」という耳慣れぬ言葉に、存保は小さな戸惑いを覚えた。が、元家臣に「友」と呼ばせる若者に興味を抱いた。

「会おう。どのみち、退屈していた」

短く応じると、やがて資吉が長身の若者を連れて戻ってきた。

白銀しろがねに紅系威べにいとおどしの二枚胴の具足、深紅の陣羽織を身に付けた、文句なしの偉丈夫である。

存保は座ったままじろりと信親を睨んだ。立ち上がりも出迎えも、挨拶もしない。そのような間柄でないことは、互いに百も承知のはずだった。

信親は背筋をピンと伸ばして歩いてくると、三步ほど離れて、地べたに座り込んだ。

「出陣前のご多用の折、恐れ入りまする」

若々しく朗々とした声には張りがある。体を鍛えている証だ。

「かねてより十河殿には、長宗我部の次期当主として、きちんと申し上げねばならぬと思うておりました」

信親は存保に向かい、恭うやうやしく長身を折り畳んだ。小笠原流礼法に

友よ 第11回

通じているらしいが、確かにそれらしい仕草だ。

「乱世四国にあって、わが長宗我部が阿讃を執拗に攻め、戦乱によって数々の大切な命を理不尽に奪い、十河殿を始め多くの方々に深い悲しみをもたらしたこと、この通り、衷心よりお詫び申し上げます。何とぞ、お赦しください」

信親は地面に額を付けたまま、微動だにしない。

存保は内心少なからぬ衝撃を受けた。

資吉も最初は驚いた顔をしていたが、「友」と呼ぶ若者の隣で同じように平伏した。資吉も、信親と並んで暴れていた仇敵の一人だった。聞こえるのは、焚き火のなかで木が弾ける音だけだ。

「なぜ、今になって詫びる？」

存保の問いに、信親は地面に顔を伏せたまま、よく通る声で答えた。

「今宵のうちに詫びておかねば、明日の戦で私か十河殿か、いずれかが命を落とすやも知れませぬ。その前には是非にもと思ひ立ち、わが友に取次を頼みし次第」

何万回詫びたとて、過去は変わらぬ。失われた命も戻りはしない。だがそれでも、勝者が敗者に詫びることなど、普通はなかった。

「長年の戦乱のせいで食うにも事欠く豊後商人から、讃岐勢にふた月分の兵糧を献上したいと申し出があった。長宗我部の差し金だな？」

面妖な話だったため存保が調べさせると、裏で穴喰屋ししくいが動いてい

友よ 第11回

ると知れた。

「友軍がお困りのご様子ゆえ、差し出がましい真似を致しました。高崎山城にも兵糧を運び込ませてござる。明日さえうまく乗り越えられれば、よき籠城戦ができればよい」

白銀の兜はずっと下げられたままだ。

「ひとまず面を上げられよ。人に頭を下げられるのは、嫌いでな」

ゆっくりと身を起こした土佐自慢の御曹司は、惚れ惚れするほど精悍な顔つきをしていた。この男が精鋭を従えて攻めてきたなら、手ごわいはずだ。

「貴家には、よき将兵がおわしました。あの中富川の合戦では赤沢宗伝殿、七条兼仲殿に苦しめられ申した。戦場で宗伝殿の如き采配が振れたならと思えど、容易には参りませぬな。もしここにおわせば、さぞや頼もしかろうと残念でなりませぬ」

いないのは長宗我部のせいだが、名を覚えられているだけで、二人の死が多少報われたような気もした。

「長宗我部もまた敗れ、降りましたゆえ、十河殿のお気持ちを少しはわかるつもりでござる。私もまた、乱世に友を幾人も失いました」

「……友、とは？」

存保がごく自然に問いを発すると、信親は微笑みながら答えた。

「友とは、好きな人でござる。例えば、川をお考えください。無数の水の滴から成る川は、人の世に似ているとは思われませぬか。人の人

友よ 第11回

生は無数にあれど、今、萬壽寺境内の一隅で、同じ時代の流れの中を
生きているのは、われらだけでござる」

変わったことを言う若者だ。

身分も富貴も関わりなく、人は時の流れには抗えない。何の因果か
そこに集まった滴は、善悪好嫌を問わず皆で川となって、交じり合
いながら流れてゆく、とでも言いたいわけか。

「水の滴は、わずかな時を共に流れ、別れ、やがて海へ注ぎ、雲とな
って、また地へ降り注ぐ。世には川の滴ほどの数の人間があれど、会
って話せる者はほんのひと握り。ほとんどの人間には、会うことさえ
できず、すれ違って死んでいき申す。川の流れと同じでござる」

存保と信親の人生が交わったのも、同じ時代に、四国の大名家に生
まれたからだ。何かが少しでもずれていけば、一生会うこともなかつ
たろう。

「一族郎党も、家臣も、足軽も、民も、はたまた敵であろうとも、ど
れだけ齡が離れていても、生きて出会えた相手を好きになれば、それ
は友でござる」

だとすれば宗伝も、兼仲も、存保の友だったわけか。二人を失った
ことがあれほどに悲しく、今なお思いを引きずっているのは、二人が
家臣というより、友だったからか。

「時代が許しませなんだが、もしも私が阿波最強の武人、七条兼仲殿
と酒を酌み交わせたなら、必ずや良き友になれたはず。兼仲殿の大薙

友よ 第11回

刀に見合う武人たらんと日々武技を練って参りました。赤柄を握って戦場へ出ると、あの並びなき武勇にあやかれる気が致します」

信親は兼仲の力を認めたからこそ、大薙刀を引き継いだわけか。戦場で信親が輝けば、兼仲の武勇もまた世に示されると言ってもよいのだろう。

「十年にわたり互いに友を殺し合ってきた者たちが、わかり合い、友となるには、長い時を要しましょう。されど、最初の一步を今宵踏み出せぬものかと、私は願うております」

「……十河と長宗我部が、友になると？」

存保が問い返すと、信親はこくりと頷いた。

「いかにも。川はひとたび岐れわかようとも、またどこかで再び流れを合あいまみわせるもの。これから敵として相見あいまみえる島津の面々とも、いずれ友として酒を酌み交わしとうござる」

だがそれでも、攻められた者と、攻めた者は立場が違う。いや、だからこそ信親は、最初に深々と頭を下げたわけか。

「貴殿は、川が好きなのか」

やけに川の譬たとえが多い若者だ。どうでもよかろうが、少しばかり気になった。

信親はこれ以上はないという笑顔になった。

「大好きでござる。川の話なら、三日三晩でき申す。われらの手で太平あかつきの世を掴んだ暁あかつきには、全国の川を巡って歩きたいと、今から楽し

友よ 第11回

みに致しております」

確かに、この快活な若者なら、輝く笑みで友を幾人も作れるだろう。あちこちの友を訪ねて、川遊びもできそうだった。

「わしも川を嫌いではない。よい魚が釣れる川は特に好きだ」

「土佐の四万十川しまんとうがわに、赤目という幻の大魚がおるとか、おらぬとか。いつか十河殿と確かめてみとう存じまするな。仲直りできますなら、その印に、いかがでございましょう？」

「悪い話ではない。中富川にも、松鯛という幻の魚の噂があつてな。いずれわが友たちの墓前に供えたいのだが、手伝うてくれるか」

「喜んで。幻なら、釣り手は多いほうがよい。わが友たちにも骨を折らせましょう」

長宗我部はこの若者の時代、さらに栄えるだろう。十河も負けてはおれまい。

満面の笑みを浮かべるかつての仇敵に向かい、存保はほんのりとした笑みを返した。今はこれが精一杯だが、次は今より自然な笑みを浮かべられるかも知れない。

「されば、これにて。明日は苦しき戦となりますが、力を合わせて戦い抜きましょう」

別れを告げて立ち去る信親の背に、存保は「ひとつ、尋ねてよいか」と言葉を投げた。

長身がぐるりと振り向いた。

友よ 第11回

「手始めに、われらが友になれると思うか」

信親はにっこりと笑いながら、大きく頷いた。

「同じ乱世に生まれ、同じ陣にあり、共に命を助け合って戦える人間は、どれだけおりましようか。今宵お会いして、わかりました。十河殿は私にとって、すでに友でござる」

面映おもはゆい。この若者に言われると、くすぐったい嬉しささえ覚えた。

「では、もしやあの仙石殿もか？」

「もちろんでござる」

信親の口元に白い歯がこぼれている。この若者の笑顔は伝染するらしい。

存保は自分の顔に、笑みが自然に広がってゆくのがわかった。

宗伝や兼仲と笑い合った時と同じ種類の笑みだ。心底憎んでいた敵の微笑みを見ながら、存保は不思議な気持ちになった。初めて抱く感情だろうか。心が少し軽くなった気がする。

これはもしやへ赦しではないのか。存保の心は、信親と会う前後で、明らかに変わっていた。この若者は人を動かす不思議な力を持っている。

信親が去った後、存保は久しぶりに清々しさを感じていた。

なるほど、資吉が言ったことも、あながち嘘ではなかった。消えぬにせよ、怨恨が和らげば、ずいぶん心が軽くなる。存保は少しく得をした心持ちだった。

友よ 第11回

「わしはよき友を失ったが、今宵また、よき友を得たのやも知れぬ」
焚き火を見ながらこぼした独り言は、聞かれてしまったらしい。
信親を送り出してからなぜか戻ってきた資吉が微笑んでいるのに、
存保は氣付いた。

水口通集
五

仙石はまたズルツと涙を啜すすった。
頬当を付けても、自慢の鼻っ柱まで覆わないから、涙水が垂れてき
てかなわない。

早暁、仙石は金銀を鏤ちりばめた具足を身にまとい、八千の兵を率いて
府内を出ると、白滝台しらたきだいという名の小高い丘で、いったん進軍を止めた。
将兵を休ませるためだと皆には伝えたが、実際は土壇場で迷いが生
じたからだった。

——本当に、わしで勝てるのか……。

仙石は腕を組んで、いつものように眉を顰める。

念のために存念を聞いておきたいと思い、資吉に信親を呼びにや
らせていた。

長身の若者が現れると、仙石に向かって片膝を突き、頭を下げた。

「一日余り出立が遅れたが、これより島津を攻める。勝てるな？」

「畏れながら、勝てませぬ」

驚いた。即答する信親の顔を睨んだ。口元を固く結んだ凜々しい表

友よ 第11回

情をしていた。

「じゃが、全軍で攻めよと申したのは、お前ではないか」

「奇襲は時を選ぶもの。すでに敵はわが軍の動きを掴み、待ち構えておりましょう。白滝台は見晴らしが良いぶん、敵からもよう見えておりまする」

仙石は心中おだやかでなかった。白滝台への布陣が間違っていたと暗に責めているのか。

「お前が言うたように、鶴賀城の兵と挟み撃ちにできようが」

「私有家久なら、山野に兵を散らして敵を待ち受けます。昨日も島津の総攻めがあった様子。飢えと疲れのために、城兵たちはもう戦えますまい」

言い分には一理あるようにも思えた。もともと信親はその夜のうちに奇襲するよう進言していた。

「されば、どうすればよいと申すのじゃ？」

「兵を引き、高崎山城で籠城なさいませ。援軍が来るまでの兵糧と矢弾は、すでに手配済みでございまする」

鶴賀城は開城、降伏するほかない。府内の北にある高崎山城は大友家の堅固な詰城であり、秀吉の援軍が来るまで必ず持ち堪えられると、信親は説いた。

「じゃがそれでは、府内を焼かれるではないか」

「直ちに領民を街の外へ逃し、四国勢で城に立て籠もりまする。各地

友よ 第11回

に散らばる大友勢とも呼応しつつ、八千の兵でしかと守れば、ふた月では決して落とされませぬ」

「秀吉公は陣を固めよとも仰せじゃ。国都を焼かれれば、豊後を失うに等しい。お叱りを受けるのではないか」

「人の命は戻りませぬが、人さえ生きてあらば、町はまた作り直せまする。たとえ一時お叱りを受けようとも、秀吉公なら、必ずやおわかりくださるはず」

秀吉から信親が拝領した深紅の陣羽織を見ていると、そんな気もしてきた。今の信親の言い回しをそのまま使うか。

「これより太平の世となれば、国づくりのために人が要りましょう。かような地でわれら四国勢が人材を失うのは大損でございませぬ」

なるほど国づくりか。とすれば、確かに損やも知れぬ。これまで仙石は戦しか頭になかった。

だがまず、目の前はどうか。秀吉が怒った場合、矢面に立たされるのは総大将の仙石なのだ。

「島津が悠々と攻め込むのを、指くわえて見ておれと申すか」

「さにあらず。われらは府内の街の随所に兵を伏せ、侵攻してくる島津を攪乱かくらんいたしましょう。隙あらば、籠城中も長宗我部が奇襲、夜襲を仕掛け、島津を散々に弄もてあそばすんでご覧に入れまする」

仙石は少し考えてから、小さな声で問うた。

「じゃがな、信親。出陣すると大見得おおみえを切って、ここまで来てしもう

友よ 第11回

たのじゃ。今さらやっぱり兵を返すでは、さすがにわしも恰好が付か
んではないか」

おまけに一度出陣を命じて取りやめている。またやめれば、朝令暮
改だと諺そしられよう。

「されば、鶴賀城の対岸にある鏡城かがみじょうの跡に陣を敷かれませ。かの地
なら、対岸の城と敵の布陣の様子がよく見えるはず。実際に眼で確か
めたうえで、戦況が不利とわかれば、作戦の変更に将兵たちも納得い
たしましょう」

なるほど元親や存保の反対を容れて撤兵するなら、度量の大きな
将が臨機応変に対処したとの見方もできなくはない。若輩者の策ゆ
え、軍議にあっては先ほどの迎撃策を仙石から提案してほしいとも、
信親は言った。

戦は水物だ。知恵のない者がいくら思案したところで、見通せはし
ない。仙石が悩むべきは、長宗我部信親が信ずるに足る人物か否か、
という一点のみだ。

仙石は信親をじっと見つめた。

澄んだ瞳だ。若さはいい。若き日の仙石も、兄たちを討たれ、乱世
を渡っていこうと決意した頃は、こんな目をしていたろうか。仙石は
己が才覚のなさを厭というほど悟らされ、妻や子を守らねばと思い、
そのまま保身に汲々としてきた。

昔の自分に出会えた気がする。仙石は確信した。この若者は、信じ

友よ 第11回

てもいい。

「相わかった。お主の言うとおりにいたそう」

「ありがとうございます」

同時に立ち上がった時、資吉がよく言う「友」という言葉が浮かんだ。心がくすぐったい。

「資吉、直ちに陣触れを出せ。鏡城跡へ向かう」

仙石が信親に身を寄せると、若者は高い所にあった耳を寄せてきた。

「信親よ。高崎山城でも、こっそりわしの相談に乗ってくれんか」

「畏かしこまってございまする」

信親が真っ白な歯を見せて笑うと、覚えぬ仙石も軽く笑みを返してしまった。



六

戸次川西岸の小山に築かれた鏡城は遠い昔に破却され、今はその跡を残すのみである。その麓でひとまずの布陣を終えると、信親は川べりへ出た。対岸には鶴賀城が聳そびえているが、羽柴軍の進攻を受けて、島津軍はすでに城の包囲を解き、姿を消していた。

「彦十郎は、何と見る？」

「島津方にはたっぷり時がございました。府内に潜ませた忍びから報せを受けて白滝台の陣を見、われらの見も知らぬ山野のあちこち

友よ 第11回

に兵を伏せておりましよう」

これまで仙石とは、彦十郎と相談を重ねた上でやり取りしてきた。移り気な総大将で、勝機を逃しはしたが、戦に負けぬなら、それでいい。合戦無用との秀吉の厳命を考えても、戦をせず籠城戦に入るほうが、四国勢には良き身の処し方だ。

「一万八千の兵あらば、私なら木っ端微塵に羽柴軍を撃破してみせまする」

島津が対岸に布陣せぬのは、もしも鶴賀城の兵が最後の死力を振り絞って山を下ってくれば、挟撃されると恐れたせいか。今のうちに、城内の兵が落ち延びてくれればいいのだが、信仰厚きキリシタンたちが逃げ出す様子はなかった。

「この地で夜襲されてはかなわぬ。暗くなり始める前に、必ず兵を引いていただこう」

「いかにも。敵は大軍ゆえ、暗がりの追撃も恐ろしゅうござる。総大将とて、負け戦は好まぬはず。道理と損得を説けば、野戦を選びはいたしますまい」

後ろの小山を振り返ると、眺めのいい山頂付近まで登った仙石勢が、布陣の真っ最中だ。

河原を歩き、水際まで寄ると、しゃがんで水をすくった。

「水が澄んで、良い川だ。確かに龍が棲んでいそうだな」

後ろの彦十郎から応答はない。無駄なことは言わぬ男だ。

友よ 第11回

自陣の端近くで川面をじっと眺めている小柄な若者を見つけた。

「航八。戸次川では龍以外に、何が釣れそうだ？」

石清川いわしがわの老漁師の孫、航八も十六歳となり、戦に加わっていた。初陣である。冬でも顔が浅黒い。

「地元の漁師に尋ねてみましたら、今時分は鱸すずきが狙い目だそうです。川で一生を暮らす鱸は頭が小さくて、そのぶん体が大きいとか。浅場において、背が黒く焼けているそうです。もちろん海から上ってくる鱸もいるそうですが」

漁師たちは遅たくましい。戦などそっちのけで、川から恵みを受け取るうとしている。

「るいの教えは厳しいか？」

航八は利発で機敏なため、るいのもとに付け、この三ヶ月ほど諜報の仕事を手伝わせてきた。

「それはもう。失礼ですが、鬼のように見える時がございます」

信親は苦笑した。厳しいのは命を落とさせぬためだ。多くの師から学んだ信親にはわかる。

「るいは、お前なら、与えた役目を立派に果たせると言っていた」

「是非とも、若殿のお役に立ちとう存じます」

航八の嬉しそうな顔を見て、信親はむしろ寂しく思った。本来なら、戦などにかかわらず、漁師をしているほうがずっと幸せなはずだ。だからこそ、秀吉のもとで、もうすぐ乱世を終わらせる。信親はそのた

友よ 第11回

めに命を懸けるのだ。

「この戸次川で戦はせぬが、籠城戦でも謀者は大事な役割を担う。お前にもいずれ仕事を頼みたい」

「畏まりました」

痩せた肩に手を置くと、航八がぺこりと頭を下げた。

「若、大友勢と十河勢の布陣も終わりましたぞ」

彦十郎が促してくると、信親は川べりを離れた。

仙石は癖のある難しい気性だ。元親には言い含めてあるが、軍議での存保の出方も大事だった。すべての将が撤退に賛同すれば、仙石は兵を引く約束だ。おろん存保も籠城戦をよしとしようが、物にも言い方がある。仙石のためにも、あらかじめ予め話しておいたほうがよからう。友である信親と存保が仲睦まじく語る様子を、両軍の将兵にも見せてやりたいと思った。



仙石は信親の献策に従い鏡城跡に陣を敷いた後、山中で用を足してから、急拵いあそえの帷幄いあくへ向かっていた。齡あのせい、太ったせい、坂道を歩くとすぐに息が切れる。

——家久はどう出るつもりなんじゃろな。

鏡城跡に布陣した仙石は、まず驚いた。救援に向かった鶴賀城の川沿いに、敵兵の姿がなかったからである。

友よ 第11回

調べさせると、島津軍は鶴賀城の囲みを解き、遠く梨尾山なしおやまの南、約一里の坂原山さかはらやままで引いていた。仙石には、家久の気持ちがあわかった。やがて襲来する秀吉の軍勢は二十万を超える。

島津の敵は、滅亡寸前の大友家ではなく、天下の大軍を率いる上方かみがたの軍勢に変わったのだ。逆立ちしても勝てまい。誰しも本音では、たったひとつの命が惜しくて堪らぬのだ。槍で突き刺されたら、痛いではないか。仙石なら迷わず引く。それが人間だ。家久とて同じだ。つまりこの戦には、戦わずして勝てる。

ならば、今ここで戦わねば、損ではないのか。信親はどう見ているだろう。あの若者なら、諮はかって決めてもいい。資吉は信親を「友」と呼んでいた。小耳に挟んだのだが、信親には友がたくさんいるのだという。もしかして、仙石も信親と友になれるのではないか……。

柄にもない事を考えるうち、顔に笑みが浮かんできたが、小太りの体に登り坂はしんどい。小休止を入れようと両の膝小僧に手を置いた時、仙石の目に、思わぬ光景が映った。

——何じゃな？ あれは……。

仙石はぶったまげた。衝撃だった。裏切られた気持ちがあした。川べりに整然と敷かれた十河の陣で、信親が白い歯を見せながら、仇敵であるはずの存保と談笑している。へ鳥刺し舞を踊るほどにいがみ合う二家の将がなぜ親しくしているのだ。

友よ 第11回

呆然としながら、その姿に強烈な嫉妬を覚えた。ついで、背筋が寒くなった。泣き出したい気持ちさえ、した。やはりそうだ。これこそが、乱世なのだ。信親も例外ではない。友などと、愚にもつかぬことを考えた自分が恥ずかしくてならぬ。泡立つ怒りが腹にふつつと湧いてきた。

仙石は狂ったように歩き出した。震えるほどの憤怒ふんぬのおかげで、闘志が湧いてきた。

——長宗我部は十河と結んで、仙石を陥れる肚じゃ。

「わしが呼ぶまで、決して誰も通すな！」

帷幄まで辿り着くと、伴をしていた資吉に強く言いつけ、仙石は床几に腰掛けた。

千々に乱れる考えをまとめてから、諸将を呼び出す。

めんじゅうふくはい面従腹背するだけの存保は、自領の讃岐を仙石に奪われたことを恨んでいる。存保にとって、仙石ほど邪魔な者はいない。隙あらば仙石を陥れ、讃岐を取り戻して三好家を再興せんと目論んでいる。存保が資吉を手なづけているのはその証左だし、人間なら至極当然の感情だ。その存保が信親と手を結んだ。わざとらしく両軍がいがみ合いを演じてきたのも、仙石を騙すためだ。とすれば、高崎山城の籠城戦も、長宗我部と十河が密かに示し合わせた上で信親が献策してきたと考えていい。籠城戦のまっ最中に、仙石は流れ玉にでも当たって、戦死させられるのではないか。

友よ 第11回

——このままでは、わしは奴らに……殺される。

すべては、目の上のたん瘤に等しい仙石の失脚を目論んだ、意趣返し
の罠であるに違いなかった。

仙石は独り、熟慮を続けた。三度目の用足しに、立つ。

今回はしつこいほど用を足した。だから万が一にも、引田の二の舞
にはなるまい。同じ失敗を二度もするのは、二流の人間だけだ。仙石
はもう一流だから、内なる敵の姦計を見抜けた。

長宗我部父子が親しげに語り合う姿を、これまで何度見せつけら
れたことか。秀範とは口論ばかりなのに、あの二人の仲睦まじい様子
が妬ましくてならなかった。もとより信親が元親に無断で献策をす
るはずがない。すべては元親の謀略だったのだ。もしかしたら信親だ
けは善意なのやも知れぬが、若さゆえに老練な大人たちに利用され
ているのだ。

仙石は鏡城跡の外れで、放尿を試みた。が、緊張のせいか、ちよろ
りとするだけだ。いかん。

さて敵の策略を見破った今、仙石はいかにすべきか。庄林がいれば
諮ったろうが、どこかへ行ってしまった。

すでに島津軍は兵を引いた。

羽柴軍が鶴賀城へ入れば、坂原山の家久はそのまま睨み合いを続
けるか、あるいは兵を引くだろう。戦にはならぬ。

仙石は豊後の要衝を陥落から救い、府内を守った名将となる。

友よ 第11回

そうか、長宗我部と十河は、それが癪なのだ。

二人とも仙石よりはるかに戦上手で、あの黒田官兵衛や加藤清正くらいに強い。仮に戦になったところで、目の前に敵が来れば負けはすまい、秀吉の威光に怯えて戦場から逃げ出した九州の田舎侍など、薙ぎ倒してくるはずだ。

若い頃、秀吉に励まされた時のことを思い出した。小競り合いを仕掛けた仙石は、敵に敗れて逃げ帰った。その気もないのに「腹を切る」と嘯く仙石に、秀吉は「何もせぬより、何かに挑んで敗れるほうが、人は大きくなれる」と励ましてくれた。

万一戦になって負けても、傷つくのはしよせん敵だった土佐勢と、仙石にとって邪魔な十河勢ではないか。

仙石は長宗我部や十河と違い、秀吉に長年仕えてきたお気に入りだ。悪いようにはされまい。四国から長宗我部と十河が去り、新参者がやってくるほうが、仙石も助かる。四国攻めで顔に泥を塗られた意趣返しにもなる。そもそも仙石は四国と何の縁もゆかりもなかった。そうだ、この地で功を立てて、どこか四国以外の別の地へ移してもらえばいいのだ。

——おお、物を考えておいたら、意外によう出たわ。

今回はしっかり用便を済ませると、仙石は帷幄へ戻った。まだ呼んでもいないのに、息子の秀範が偉そうに座っていた。

——決めた。誰が何と言おうと、鶴賀城へ入る。島津が邪魔をする

友よ 第11回

なら、戦をする。

勝ち負けなど、いずれでもいい。戦から逃げず、戦った証を残すことが、保身のためには何よりも大事なのだ。仙石はあの四国征伐でそれを学んだ。

「皆を呼べい」

太めの声を作って資吉に申し付けると、仙石は床几しょうぎにどっかりと座った。すでに決意は固まっている。何を言われようと押し切る。それこそが、人を動かす総大将の力だ。

やがて、青白い顔の大友義統、鬢びんを逆立てた十河存保が現れ、最後に長宗我部元親が信親を伴って、悠然と姿を見せた。

「見ての通り、家久が逃げ出しおった」

仙石は腕を組んだまま、眼下にある戸次川の青い水面だけを見ていた。誰とも目を合わさぬと決めていた。睨み合っても、目力めちからでは元親にも、存保にも負ける。信親の澄んだ眼には惑わされまい。義統は向こうから目を逸らしてくる。この軍議は、総大将の命令を伝えるだけの場だ。

「われらはこれより、鶴賀城に入り、逃げる敵を追撃する」

嫌な沈黙が流れた。だが、もともと呉越同舟こえつどうしゆうの陣だ。ささくれだつていて、当たり前なのだ。

「お待ちくだされ」

長い沈黙の後、最初に口を開いたのは元親だった。何か、言ってい

友よ 第11回

るようだった。

長宗我部や十河が反対を唱えているらしいが、魂胆が透けて見えた。その手は食わぬ。ひたすら聞き流すだけだ。

島津家久は名將だという。名うての戦上手で、大友宗麟を大破した耳川合戦でも、龍造寺隆信を討ち取った沖田畷の戦いでも、へ釣り野伏^{ぶせ}で見事に敵を破ったそうなの。

だが、三度も同じ手を使う馬鹿がいるものか。今回は逃げたいから、逃げたのだ。どのみち島津が必ず負ける戦だ。武名をほしいままにしてきた名將であるがゆえに、敗北を強く恐れるのだとなぜわからぬ。天下を敵に回して勝てるはずもない。名將だからこそ、これまで築いてきた己が名声を守るために、無用の戦を避けるのだ。

「敵は秀吉公のご威光に怯えたのじゃ。われらが鶴賀城に入れば、坂原山からさらに南へ兵を引くであろう。それを追撃する」

これまでは秀吉の指図で勝ったことしか、なかった。だが今回は、命に背いてまで勝利を得るのだ。これをきっかけに、仙石はさらにの上がる。これからはもう、仙石秀久を二流の将なぞと、誰にも呼ばせはせぬ。

「大軍に加わり、勝って当たり前の戦に勝ったところで、手柄を皆で分けねばならん。じゃが今なら、手柄をわれらの独り占めにできる。攻めぬ馬鹿がどこにおる？」

将たちというより、仙石は自分に向かって言っている。

友よ 第11回

敵情をよく調べてからにすべきだと誰ぞが言ったが、その間に敵が逃げ出したら、追撃できなくなる。実際、出陣を遅らせた仙石が時機を失したと、信親まで責めたではないか。

「秀吉公はへ懸け留め」をせよと仰せじゃ。敵を逃してはならん」
島津が兵力を温存したまま本国の薩摩へ逃げ込んで、堅く守りを固めたなら、攻め破るのに多少手こずる。秀吉は「合戦無用」と釘を刺しながらも、同時に逃がしてはならぬとも言っていた。眼前の情勢の変化に応じて最も適切な手を打つのが、一流の将なのだ。

「すでにわれら四国勢は、豊前や筑後で兵を動かして秀吉公の不興を買っておる。挽回するには、手柄を立てねばならん。先日いただいた叱責の文を見て、わしは震えが止まらなんだ。このまま何もせず、府内を奪われてみよ。わしらは首を刎ねられるぞ。秀吉公のお心をわしは誰よりも知っておる。ゆえにここまで立身出世してきたのじゃ」
今ある仙石の地位がすべてを示している。

総大将はこの仙石秀久だ。

「わしはすでに心を決めた。わが言葉は、秀吉公の言葉と思え。逆らうことは許さぬ」

反対する者たちを己が意のままに従わせる。

何というへカ」の快感なのだ。

配下の浅はかな諫言かんげんを押し切って戦い、勝利する。これぞ一流の将たる証ではないか。

友よ 第11回

仙石はひとり大きく頷くと、立ち上がった。

「この戦が勝利で終わりした後、お主らは必ずわしに礼を言うであろう。直ちに渡河を終えよ。念のため対岸に布陣し、辺りの様子を確かめてから、鶴賀城へ入るのじゃ」

仙石は高揚していた。虎の威を借る狐が輝いて、どこが悪い。狐にだって、人生があるのだ。仙石は秀吉の寵臣だ。狐だって、運と度胸さえあれば、狼くらいには伍しうる。

帷幄を出ようとする仙石を誰かが必死で引き止めていた。信親か。お前はわしを裏切ったではないか。友だなんぞと馬鹿々々しい。今は乱世なのだ。友なぞいるものか。

仙石は最後まで、誰とも目を合わせなかった。

(続く)